シーズ名	抗凝固薬服用者における大腸内視鏡的摘除後出血の予測に関する研究
所属・役職・氏名	消化器内科学・病院講師・福永　周生　(FUKUNAGA, Shusei)

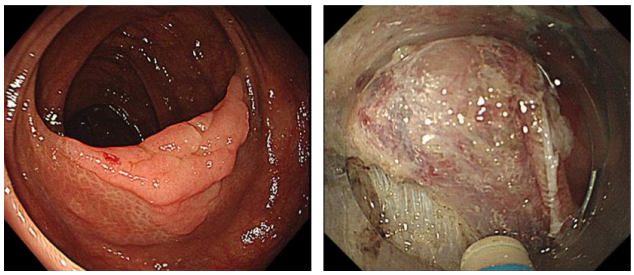
＜要旨＞

近年、心血管疾患に対する抗凝固薬服用者が増加している。一方、大腸腫瘍に対する内視鏡的摘除では、抗凝固薬服用者で治療後出血（後出血)の頻度が高く、後出血の増加が危惧される。抗凝固療法中の心房細動患者ではORBITスコアという大出血の予測モデルが考案されている[1)]。我々は内視鏡的摘除の１つである内視鏡的粘膜下層剥離術を受けた抗凝固薬服用者における後出血に対し、本スコアの有用性を報告した[2)]。しかし、件数の多い内視鏡的粘膜切除術やポリペクトミーを含めた、内視鏡的摘除全体では、その予測に関する報告はない。本スコアの有用性を明らかにすること、さらに新たな後出血予測モデルを確立することを目標とする。

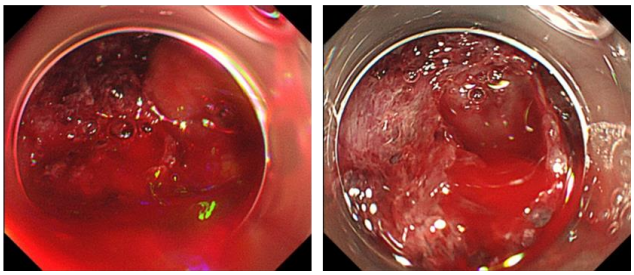
＜研究シーズ説明＞

近年心房細動において、ワルファリンのみならず直接作用型経口抗凝固薬（direct oral anticoagulants: DOAC)の使用頻度が増加し、抗凝固薬の内容は徐々に変化しつつある。抗凝固薬服用は後出血の重要なリスクであるが、治療前後の長期間の休薬は、致命的な血栓塞栓症を発症させる可能性があり、近年では継続や短期間の休薬が推奨されている。今後増加が危惧される後出血は、患者・医療従事者の負担を著しく増加させるため、DOACも含めた後出血の予測や対策は急務である。よって本研究の重要性は高いといえる。

大腸癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術



後出血



本研究では、抗凝固療法中の大腸内視鏡的摘除患者を対象とし、既存のスコアの有用性を明らかにし、さらには後出血例と非後出血例の患者・病変背景、治療手技を検討することで、後出血の危険因子を探り、新たな後出血予測モデルを確立することを目標とする。後出血の予測が可能となれば、後出血のハイリスク症例を絞り込むことで、後出血予防の治療や手技の開発につなげることが可能となると考えられる。

＜アピールポイント＞

近年の高齢化に伴い、大腸腫瘍に対する内視鏡的摘除は増加している一方、心血管疾患に対する抗凝固薬服用者も増加している。抗凝固薬は内視鏡的摘除後出血を増加させるが、その予測は困難である。発生時には患者・医療従事者の負担を著しく増加させるため、後出血の予測や対策は急務である。本研究により後出血の予測が可能となれば、将来的に後出血への対策を立てやすくなり、最終的に後出血の減少に寄与すると考えられる。

＜利用・用途・応用分野＞

本研究の成果は、他の内視鏡治療全般にも応用することができ、後出血の減少を目的とした様々な薬剤や医療機器の開発に貢献し得るものと考えられる。

＜知的財産権・論文・学会発表など＞

1) The ORBIT bleeding score: a simple bedside score to assess bleeding risk in atrial fibrillation. O'Brien EC, et al. Eur Heart J 2015;36:3258-64

2) Can the ORBIT score predict delayed bleeding after colorectal endoscopic submucosal dissection in patients receiving oral anticoagulation therapy? Fukunaga S, et al. Gastrointest Endosc. 2018; 87:Suppl. AB399

＜関連するURL＞
https://ocu-gastro.jp

＜他分野に求めるニーズ＞
内視鏡的摘除後出血を来しにくい抗凝固薬、出血予防の内服・外用薬、内視鏡治療関連機器の開発など

キーワード	大腸腫瘍、内視鏡的摘除、抗凝固薬、後出血